入賞

福島の過去と現在と未来に思いを馳せる

京都教育大学附属京都小中学校
猿渡（さるわたり）　悠月（ゆづき）

私は今年の夏に福島フィールドワークで福島を訪れた時、情報や言葉では伝わらない、行かなければわからないことがある事を実感し、静かな、しかし言葉が出ない程の強い衝撃を受けた。それを一番強く感じたのは請戸小学校の見学の時だった。

請戸小学校の中は、教室であったことが信じられないほど損壊していた。震災前の写真がある部屋もあったが、目の前に映る光景にはその面影はなかった。剥がれ落ちた窓から見える外の景色は何気ない風景だというのに、その時立っていた場所は、外とは違う空気を持っていたように思う。両親から、震災当日に津波に飲まれる街のニュースを見て、あまりのショックにテレビに向かって手を握ってひたすら祈ったという話を聞いていたが、その気持ちをこの場でも強く感じた。

今見ても大きな衝撃と悲しみを感じるが、発生時、実際にこの小学校だけでなく、自分の家が、故郷が、津波に飲み込まれていく惨状を見ていた人たちはどれほど辛かったろう、と胸が痛んだ。

同時に、震災を知らない世代に、現地に足を運んで震災当時の様子が残った場所を見て欲しいと強く思った。

だが、請戸小学校を含めた震災当時の記憶を残した場所が、老朽化や街が復興していくことで徐々に減っていく可能性もあり、実際に街を歩いたりして昔の状況を感じるのは難しい。

そこで私は、バーチャルを利用して震災当時の光景を後世に残せばいいのではないかと思った。

やり方としては、周辺をスマホやiPadで映すと、震災前と震災後の画像や映像が画面に映るという方法だ。震災前後の画像等があるのは、私が請戸小学校で、震災前後の風景を見比べて受けた衝撃を、バーチャルでも体感して欲しいと思ったからだ。

宮城でもVRを使った震災体験が出来る施設があるが、それは室内のみなので、それでも十分衝撃は伝わるだろうが、実際今立っている場所とその辺りの震災当時の状態を比べて感じると、インパクトがより強いのではと思う。

このように、最先端技術を使って震災の記憶を伝えることで、震災の恐ろしさを感じるだけでなく、福島の復興の道のりも知り、これからの未来の福島を想像していくことにも繋がっていくのではないだろうか。

そして現在、世界中で未曾有の災害が多発している。また、原発を新しく導入する国もある。

そこで、世界各国の人々に福島を訪れていただき、このVR体験を通して、地震・津波・原発事故などの被害を受けても、懸命な努力によって復興への道を歩んでいる姿を見て貰いたい。それによって福島を、もし自分達の国で災害や事故が起きた時の模範的な復興のロールモデルとして示す事が出来ないだろうか。合わせて特産物や豊かな自然など、福島の素晴らしい所をアピールする事で地域産業の活性化、その他さまざまな可能性を拡げられると思う。

そしてそこから、福島が「震災で日常が奪われた場所」というだけでなく、「活気ある魅力の多い場所」という印象を持って貰える場所になっていって欲しい。

私も含め一人一人の力は微力でも、福島に思いを寄せ、復興を願う気持ちが大きな動きとなり、福島がより良い方向へ変わっていくことを心から願う。そして、私の提案がその一助になれたら本当に嬉しく思う。